

この冬までおばあちゃんは一人でいなかで暮らしていた。私の住む町から車で四時間もかかる場所だ。

いなかには雪が深くなる。ほうっておくと、雪が家をつぶしてしまうこともあるらしい。おばあちゃんは屋根に積もった雪をかき落とそうと、はしごをのぼりかけて足をすべらせてしまった。

腰を打ったまま雪のなかでうめいているのを、たまたま訪ねてきた人が見つけて、救急車を呼んでくれたそう。看護が必要だからというので、こっちの町の病院に入院することになった。お母さんが通いやすい。そのうえ、私もお見舞いに行きやすい。

入院したばかりのころは、おばあちゃんはまだ元気だった。ギプスをつけて寝たままにさせられてはいたけれど、塾へ行く途中に寄った私を、昔話でかならず笑わせてくれたのだ。

ギプスは三ヶ月も外れなかった。おかげですわることも、寝返りをうつこともできなかった。

おばあちゃんはだんだん無口になり、ギプスが外れた時には、自分一人で歩くこともできなくなってしまっていた。

あれは、入院して二ヶ月ほど過ぎたころだったと思う。その日も私は、塾へ行く前におばあちゃんをたずねた。

いつもの部屋のそのベッドには他の人が寝ていた。見慣れたドアの前で困っていた私を、看護師さんが新しい部屋に案内してくれた。

そこは一人用の部屋だった。ドアの形は同じ。でも開けたが左右反対で、ちょっと変な気持ちがあった。開いたとたん、私は、どうしておばあちゃんここに移されたのか、すぐにわかってしまった。

こんな人をテレビで見たことがある。きのう会ったときは、すっかりした顔をしていた。でもいまはなんだか、赤ちゃんみたいだ。目をとろんとさせて、寝たまま窓の外を見ている。おばあちゃんは私が入ってきたのにも気づかなかった。

そのとき、お母さんが入ってきた。

それでもおばあちゃんはこちらを見なかった。

お母さんは私に、「きょうはちよっと遠慮してくれる？」と言った。

私は「うん」とうなずくしかなかった。そのとき、はじめておばあちゃんがふりかえった。

こんな目をこれまでなんか見たことがある。そうだ、小犬がじゃれつこうとしている時の目。写真で見た小さいときの私の目。友だちの妹のような目。

そんな目で、おばあちゃんは言ったのだ。

「おねえちゃん？」